

ダニエル・カールの

聞きたい! 消防団

第12回 奈良県奈良市消防団

～全国初! の消防団・DMAT・DPAT合同訓練に参加してきました!!～

今回は、奈良県奈良市をお訪ねしました。

全国初! の訓練が行われるということで、私もゲスト参加をさせていただきました。

地域に密着して活動している消防団が、専門チームであるDMAT（ディーマット）・DPAT（ディーパット）と行う連携訓練は、全国初の試みだそうですね。

この訓練はブラインド型（プレイヤーである消防団・DPAT等には訓練の内容を知らせず、想定

だけを付与して行う方法とのことです。）で行われ、当日の訓練には、奈良市消防団ほかの消防団員の皆さん、DMAT、DPATの機関をはじめ、多くの組織・団体が参加し、見学者を含めると、なんと400名を超えるかたがたが参加されました。

今回は、まず訓練の概要について、簡単に報告をさせていただき、続いて、訓練の詳細などについて消防団員の皆さんやDPATの関係者のかたからお話を伺います。

• DMAT（「Disaster Medical Assistance Team」の略）

医師、看護師、業務調整員（医師・看護師以外の医療職及び事務職員）で構成され、大規模災害や多傷病者が発生した事故などの現場に、急性期（おおむね48時間以内）に活動できる機動性を持った、専門的な訓練を受けた医療チーム。

今回の訓練には、市立奈良病院が参加。

• DPAT（「Disaster Psychiatric Assistance Team」の略）

自然災害等の集団災害の発生により、被災者に災害ストレス等による新たに精神的問題が生じる場合に、被災地域のマネジメント、専門性の高い精神科医療の提供と精神保健活動の支援のために、都道府県と政令指定都市によって組織される、専門的な研修・訓練を受けた災害派遣精神医療チーム。

今回の訓練には、「独立行政法人 国立精神・神経医療研究センター 災害時こころの情報支援センター」ほか奈良県内外のチームが参加。

訓練は平成27年2月9日(月)の15時から17時30分頃まで、奈良市内にある奈良ロイヤルホテルを貸切にして行われました。この日、ホテルは全館停電しており、薄暗い中で訓練は行われました。

当日の奈良はなかなかの寒さでして、ホテル内のトイレも水洗機能が使えなかったので、参加された皆さんは、ほんとうにお疲れ様でした。



寝たきり高齢者の担架搬送訓練の様子

続いて、II部の避難所対応訓練が行われました。ホテル2階の広間は、100人を超える避難者で埋め尽くされ、消防団は、DMAT、DPATなどの関係機関と連携して活動をしていました。災害時の混乱によるパニック状態を想定し、怒号や泣き叫ぶ声が響き渡り、多くの避難者役の皆さんの熱演によって、現場は騒然としている中で、消防団の皆さんが懸命に対応されました。



訓練会場の様子

訓練は、奈良市内で震度6強の地震が発生したことを想定して始まりました。

訓練はI部とII部に分かれていて、まずはI部が消防団による避難誘導訓練からスタートです。

消防団の皆さんは、住民や観光客役のかたがたの避難誘導などを実施していました。



女性団員が対応中の様子

私は、外国人観光客役で参加しました。

日本語が全くわからないという設定でしたので、ちょっと苦労しました(笑)。

英語の質問で消防団のかたを困らせてしまいましたが、丁寧に対応していただきました。



訓練参加中のダニエル氏



訓練の様子

訓練終了後に、訓練の振り返りが行われました。消防団、DMAT、DPATなど関係機関の代表からコメントが述べられました。私も参加者の一人としてコメントを求められましたので、せんえつながら、「あらかじめ想定される英語の質問リストを作っておいたほうがいい」などのサジェスションをさせていただきました。

消防団、DMAT、DPATの関連機関等の参加者だけでなく、総務省消防庁・厚生労働省・陸上自衛隊など多くの見学者がいて、ホテル2階の広間は総勢400名を超えるかたがによってごった返していました。

多くのメディアも取材に来ていて、この訓練の注目度の高さがうかがわれました。



コメント中のダニエル氏

次頁以降に、訓練の詳細等について、参加者の代表に取材をしていますので、ぜひ御覧ください。

訓練直後に、今回の訓練の主催者である奈良市消防団の川寄政信団長・同団西方面隊の田村英樹副隊長・同団広報指導分団の松本章子班長と共催者である「独立行政法人国立精神・神経医療研究センター 災害時こころの情報支援センター」（D P A T関係機関）の渡路子室長（消防基金の相談医としても御活躍中です。）からお話を伺うことができました。皆さん、たいへんお疲れのところ、ほんとうにありがとうございました。

奈良市で開催されたきっかけなど

ダニエル 今回のような消防団・D M A T・D P A Tが合同で行う訓練は全国初と聞きました。D M A T、D P A Tについてはアメリカ人の私も初めて聞いた略語ですね（笑）。D P A Tの正式名称は「Disaster Psychiatric Assistance Team」と伺いました。D P A Tは以前からあったのですか。

渡室長 災害時の「こころのケア」というのは阪神淡路大震災くらいから20年程の歴史はありました。体制としてあったわけではなく、精神科の先生がたが現地に行くという活動はあったのですが、システムとしてはなかったのです。東日本大震災のときに「こころのケア」の活動に多くのニーズがありましたので、その結果、組織化して展開する必要があるだろうということになり、組織づくりが始まりました。

ダニエル やはり、組織をつくったほうが対応しやすくなるということですね。

渡室長 はい。ほかの支援者とも連携がとれ、災害現場においても指揮命令系統がしっか

りするので、「こころのケア」でも東日本大震災後の平成25年4月に初めてD P A Tという組織ができました。

ダニエル 大きな災害があった場合には、出動しやすくなったというわけですね。

渡室長 そうですね。D P A Tという組織として国や自治体の指令の下に出動することになります。

ダニエル なるほど。そもそも今回の全国初の訓練ですが、この訓練を奈良で行うことになったきっかけを教えてください。

渡室長 D P A Tが新しい組織なので、なかなか皆さんに知っていただく機会がないように、災害時にはD P A T単独で活動することはほとんどまれです。災害現場に入って、精神科の医者だけで単独で活動するということはなかなか難しいので、地域をよく知っている消防団や住民の皆さんと一っしょに訓練をしたいとずっと考えていました。そこで、消防基金に相談したところ、「モデル的にやってみたらどうか」というアドバイスをいただき、御協力いただける消防団を探していたところ、こちらの奈良市消防団が快く引き受けてくださったというわけです。

川寄団長 まず、（消防団の中に）実行委員会を立ち上げ、あとは委員長を中心に委員のかたが協力して、すべて対応してくれました。

ダニエル 奈良市の消防団員さんたちは昔から消防団活動に熱心なんですよ。

川寄団長 そうなんですよ。

訓練実施までの経緯など

ダニエル 全国初というのは、こちら（奈良市）で正解だったと思いますし、今日もよくがんばっておられたと思います。でも、初めてだったので、ドキドキ、ハラハラされたのではないですか。今、訓練を無事終えて、皆さん、顔にちょっと余裕が出ましたね。ホッとされていますね（笑）。この訓練を実施するにあたって、どんなところが大変でしたか。

田村副隊長 今まで消防団としては、阪神淡路大震災、東日本大震災が起きてからいろいろな場合を想定して訓練を実施してきました。例えば、マグニチュード6クラスの地震があって、家屋が倒壊した想定で、その倒壊家屋に挟まれた人の救出訓練、救出者のAED訓練、また倒壊家屋からの出火を想定した消火訓練などを各方面隊・各分団が実施してきましたが、その先の対応がわからない。助けた後にこの先どう対処したらよいのか、どういう対応をすればよいのかと。そこでDMAT・DPATの先生がたで「顔の見える訓練をしよう」というお話になり、消防局のかたとも相談して、約7か月間、この合同訓練のためにいろいろと模索して、今日の日を迎えたわけです。

ダニエル いろいろ勉強なさったんですね。

田村副隊長 まったく初めてのことで、訓練の想定がなかなか頭に浮かばない状態で、何か月も過ぎていきました。その中でDMAT・DPATの先生がたを交えて訓練について検討する機会があり、シナリオは必要だということになりました。検討を重ねた結果、やっとシナリオ

が完成し、そこから現実的になったと思います。

ダニエル 私も参加させていただきましたが、「停電状態」「断水状態」がすごくリアルでした。よく思いつきましたね。

田村副隊長 今回、奈良ロイヤルホテルが点検のために電気と水道を止めるということでしたので、「停電状態」「断水状態」を作り出せました。

ダニエル 私も東日本大震災のときにいろいろな避難所を訪問しましたが、そのときの雰囲気似ていました。また、参加者の皆さんの演技も迫力がありましたね。松本さんも演技をなさったんですか。

松本班長 私はそのまま自然体で。消防団員として参加しました。



取材中の消防団員の皆さんとダニエル氏

ダニエル 今日の訓練はあちこちで大声を出すなど熱演をしているかたがたくさんいらしたんですけど、あのかたたちは俳優さんですか。

田村副隊長 消防団員と今回の訓練に御協力を賜りました奈良市防災防犯協議会・奈良市女性防災クラブの皆様です。

ダニエル えっー、団員さん達ですか。

へえー。皆さんで演劇もできますね。

消防団の皆さん (笑)

ダニエル すごいですね。皆さんリアリティがあつて。びっくりしました。皆さん、個々で事前にもっちり練習されたのですか。

松本班長 そこまではないと思いますが、趣味で演劇を学んでいるかたもいますし、日頃のうっぷんをはらすように大声を出しているかたもいらっしゃいましたね (笑)。

ダニエル 今までにリハーサルはしたのですか。

松本班長 していません。

ダニエル 皆さん、今日は臨機応変というか、アドリブですか。

松本班長 はい。

渡室長 ただ、事前に一部、医療支援が必要な役を20名ほどお願いしていましたので、そのかたがたにはこちらから演技指導をしました。

田村副隊長 訓練の中で、消防団員は被災者役の演技に対し、その場その場の状況に応じて対応していました。

ダニエル ほんとうにリアルでした。周りに客席を作ってチケットを売りたくなるくらい (笑)。とてもよかったですよ。

川崎団長 あれは、私たちはどういう演技をするかまったくわからないんですよ。

田村副隊長 (役割ごとに) それぞれの訓練の時間もずらして、それぞれの訓練場所にも、立ち入らせてもらえなかったのです。

DPATについて

ダニエル DPATについて、具体的な組織形態や活動内容などを教えてください。

渡室長 先ほど少しお話ししましたが、東日本大震災以降、厚生労働省がDPATという組織を自治体(都道府県や政令指定都市)につくることになりまして、今は都道府県を中心に、都道府県と政令指定都市単位で、例えば「沖縄県DPAT」とか「山形県DPAT」という形で組織づくりをしています。

ダニエル このチームには、専門家の皆さんが入っているのですか。

渡室長 実際のチームは、精神科の医師、看護師、ロジスティクスなどを担当する業務調整員というメンバーで、1チームだいたい3~5名という形で構成されています。今回の訓練には富山県、静岡県、岡山県、沖縄県など9自治体が参加しています。



取材中の渡室長とダニエル氏

ダニエル 各地から参加されていたのですね。県庁の下にこういう組織がつくられているというのですか。

渡室長 県庁指示でそういう団体が事前登録して組織されます。皆さん、ふだんは県内の病院等で働いている人たちで、災害時に県の指令でチームをつくって派遣されます。

ダニエル ボランティアで活動するということですか。

渡室長 ボランティアではありません。例えば、大規模災害で災害救助法が適用されていれば、その支援のうちの医療支援の中に含まれるので補助の対象になります。

訓練前に団員が受けた研修など

ダニエル ところで、訓練中に消防団員の皆さんと一っしょに、PTSDで悩んでいるかたがたのケアをやっていましたよね。あの対応については、(消防団員は)誰からどういう形で教わったのですか。

渡室長 DPATのスタッフからです。事前に指導をさせていただきました。

ダニエル 「こころのケア」は、容易なものではないですよね。やってはいけないこともあるでしょうし。こういうセリフは言うてはいけないといったようなことも教わったわけですね。

田村副隊長 はい。それも去年に受講したPFAの講習で学びました。

ダニエル PFA?

田村副隊長 サイコロジカル・ファーストエイド (Psychological First Aid) という心理的応急処置のことで、その講習を受けました。「していること」「してはいけないこと」などデリケートな部分を勉強させていただきました。今日も少

し予習してきたんですよ。

ダニエル すごいですね。そういうことを数か月にわたって勉強して、今日までいろいろと準備をしてやっと訓練が終わったな、と思ったら今度は取材されるんだから。大変ですよ。どうぞご迷惑をおかけしまして。

全員 (笑)

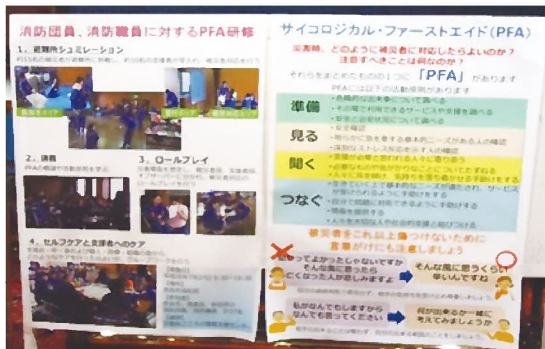
ダニエル ところで、今後のために、避難所でどんなことを言うてはいけないのか教えてください。

渡室長 このPFAというのはWHO (世界保健機関) が出している、特にアジア圏とかアフリカ圏の紛争地帯などにおいて、こんな声掛けがよかったとかいけなかったとかといったものを集約したもの (が書かれている冊子) なんです。例えば「助かってよかったですね」とか、「よかったじゃないですか、助かっただけでも」というような声掛けをついしてしまいますが、被災者のかたには、「自分だけなんで助かったんだろう」と自分を責めている気持ちがあるかたもいるといわれているので、もちろんこれはケースバイケースで絶対ということではないのですが、そういう「つい言ってしまうがちな声掛けが逆に傷つける」ということがあることが書かれていたりします。あとよくあるのは、「助かっただけでもよかったのだから、そんなふうに思ってはダメですよ」と決めつけたり、押しつけたりすることなどがあります。

ダニエル 力を落としているところで、何か批判してみたりすることですね。

渡室長 はい。そういうふうに関わってきた

り、押しつけたりする言葉だけではよくなくて、むしろ、「そういうお気持ちなんですね」というような寄り添いの姿勢がたいせつです、と書かれています。



訓練会場にあったPFAを紹介した案内板

松本班長 実は訓練中に「だいじょうぶですよ」って言ってしまいました。それって、どうなんでしょうか。

ダニエル 本能的に出ちゃいますよね。目の前で困っている人をみればできるだけ安心させたいと思って。

渡室長 それ自体、悪いことではないです。松本さんの場合はきちんと寄り添っておられたので、それはそれでじゅうぶんに意味があったと思います。

ダニエル うーん、難しいですね。ほんとうにある程度訓練をしていないとわからないものなのですね。少しだけでも習っておけば、もしも大きな災害が起きたときに、どういう行動をとればよいのかわかって少し自信がつかますね。より積極的にいろいろ携わっていけるといいか。そうなると、すばらしいことですよ。

訓練の感想

ダニエル 全国初の訓練を行うと団員の皆さんに発表したとき、どんな反応でしたか。

松本班長 最初に聞いたときはどんな訓練になるのか全く想像もつきませんでした。とにかく大きな訓練があるんだな、というくらいで。準備が進んでいく中で、PFA研修など事前準備を順序立てて行っていただいたので、だんだんと当日に向けて身についていきました。ただ、実際どうだったのかと思うと今でも不安が残っています。ほんとうに災害が起こったときに今日のような声掛けでよかったのか。これでよかったんだという答えが出ません。みんなそうだと思います。

ダニエル 災害の後、最初は避難所をつくって炊き出しなどの準備をするだけで精いっぱいですが、その後で避難所の被災者のかたがたの「こころのケア」までも消防団員の皆さんがやらなければならないということは、プレッシャーを感じますよね。

松本班長 そうですね。被災者のかただけでなく、過労などで体調をくずした団員への声掛けもしたりなどということを繰り返していくと、だんだん自分を見失いがちになります。だからこそ、自然体でしっかり冷静さを保っていたいと思います。ただ、実際にそれができるかどうか不安ですね。

ダニエル 難しいですよ。田村さんはいかがですか。

田村副隊長 訓練実施が決まったことを団長から聞いたとき、訓練内容を全て団員全員に周

知するとシナリオどおりになってしまい、危機感をもって訓練に臨むことができないと考えました。今回初めて、団員には日付と場所のみで、訓練内容や役割を伏せるなど詳細を隠して連絡をするということを試みました。

ダニエル ほう。

川寄団長 訓練前に団員たちに聞いてみると、「今日、何をしたらいいんだろう」と、皆、不安がっていました。

ダニエル 皆さん初めてのことなので想像しにくかったと思います。

田村副隊長 知らない団員のほうが、今日は堂々と訓練していたと聞きました。

松本班長 そうでしたね。

川寄団長 一生懸命やってくれました。(シナリオを知っている人は)シナリオどおりにできているか心配しながらやっていましたが、知らない消防団員は、間違っても失敗ではないからと堂々としていたと思います。

ダニエル かえって完璧にシナリオどおりにやらないほうが、ほんとうの災害時に対応できるかもしれませんね。実際の現場では何が起るかわからないので。臨機応変にアドリブでやらないといけないわけですからね。

川寄団長 そういう意味で、今日の訓練はほんとうによかったと思います。前提も知らない、シナリオも知らない、何が起るかわからないところに入って行って対応するという、実際の災害現場と同じような状況下の訓練は消防団としてたいへん貴重な経験でした。第一部と第二部に分かれての訓練だったのですが、もう第二

部のほうは、ひとときも、訓練とは思えない状況(緊張感)でした。

ダニエル 今度また訓練をするときにいい経験になると思いますよ。渡さんは、今回の訓練についてどう思われましたか？

渡室長 そうですね。細かいところは予定どおりにいきませんでした。訓練全体としては、よかったと思います。この訓練を実施するにあたって、いろいろな機関のかたが携わっています。消防団・DPAT・DMATだけでなく、県の行政や市の行政、市の医師会などいろいろな機関のかたがいっしょになってできた訓練です。ふだん、行政は縦割りなどところがありますよね。消防団もDPATもDMATもそれぞれ全部違う行政の下にあります。だからふだん顔を合わせることがないので、そこが横でつながったということだけで、この訓練は成功したと思っています。

ダニエル 一回コミュニケーションを取ってみたいことには、考え方の違いなどもわかりませんかからね。

訓練後の反省点など

ダニエル 今回の訓練を体験した感想を教えてください。例えば、こうすればよかったなどの反省点はありますか。松本さん、どうですか。

松本班長 避難所対応訓練のとき、被災者の中でもけがをされていないような、お手伝いをお願いできるかたたちへ「このかたの見守りをお願いします」といった声掛けをする余裕がありませんでした。ふだんは老人ホームで看護

師をしており、認知症のかたとも向き合っているのですが、それとはまた違った場でした。行政等からの回答が遅くて「まだなの、まだなの」という訴えに、どう声掛けをしてよいのかわからず、その場で返事ができずに「もうしばらくお待ちください」しか答えられませんでした。これでよいのかと戸惑って言葉に詰まりましたね。

ダニエル なんでもそうですよね。今まで経験のないことに対しては、最初は戸惑いがあります。一度経験することがたいせつですよ。

渡室長 災害時の訓練は備えなので、訓練は何回やってもよいと思います。例えばDMA Tでは実動訓練をひんばんに実施しているんですね。それで冷静に動いているんです。繰り返し訓練をすることがたいせつなんです。

ダニエル ほかにありますか。

田村副隊長 私は避難所の指揮本部で、連絡役という立場で参加していました。この1週間、訓練のことばかり考えていて、手帳を持っていたかと思っていましたが、この大きさではダメだと思ひまして、これ（訓練状況を記入するための一覧表のコピー）を持っていたかと思い、被災状況をメモするのに3、4枚持っていたんですが、まるで足りませんでした。今日の訓練の中で、例えば「このエリアには被災者が何名いて何を求めているか、薬は何か必要か」ということをスムーズに書き込めるような一覧表や机があるということがわかったことも、私たちにとってはいい教訓になりました。今日の訓練のおかげで、私なりに様式を考えて一覧表を作成できたことは成果があったと思います。

ダニエル 団長さんは本部にいらっしゃったようですが、全体を見てどうでしたか。

川寄団長 この訓練は、状況を知らされていない団員が活動しているということがいちばんよかったと思います。本部にいる皆さんに訓練状況を説明したのですが、皆さんから「これは、ほんとうの意味で訓練だ」と、シナリオどおりに進めるより生きた訓練になっているとお褒めの言葉をいただきました。また被災者役のかたが怒鳴っていたシーンを見て、数年前に水害で大きな被害を受けた五條市の消防団長さんから「あれはほんとうにそのとおりだ」と言われました。実際はもっとひどかったそうです。

渡室長 あのシーンはやりすぎではないかと思ったのですが。

川寄団長 いやいや。五條市では個々で訴えてきて收拾がつかず、なかには腹を立てた被災者に椅子を投げつけられたりしたこともあったそうです。今回の訓練には、奈良県内のほとんどの消防団長さんが見学に来ていましたが、皆さん感心していました。

ダニエル 今日は外国人観光客の役をやらせていただいたのですが、私を感じたことを一つあげますと、煎餅がなかったのが残念だったなと思いました。避難所にはストレスを抱えているかたも多いので、なにか口さみしくならないように、少しでも何か口にするものでいただかないですよ。なんでそういうものが避難所になのか。そういうものがあればさらによかったと思います。一生懸命困らせましたよ、英語で（笑）。「煎餅はありませんか」だとか、

マネージャーを指差して「とてもお腹がすいています。何か食べさせないと暴れますよ」といったことを話しましたね。団員さんが困っていました（笑）。でも、上手に英語で対応してくださいましたね。



ダニエル氏と英会話中の女性消防団員

川寄団長 私は訓練が始まる前に、「失敗してもかまわない。それを次の教訓につなげていかしてくれればいい」ということを話しました。

ダニエル 「失敗は成功のもと」ですね。渡さんは、何かありますか。

渡室長 当初この訓練を計画したときよりも参加者が大幅に増えました。最初の計画では消防団とDMATとDPATぐらいでまずモデル的にやってみようと考えていたのですが、いろいろな機関に賛同していただいて、最終的には、参加者が430名ほどになりました。当初の計画より膨大な人数になってしまったので、全体的にコントロールできていたかがちょっとわからないというところがあります。裏を返せばそれだけ皆さんに興味を持っていただけたということですね。

ダニエル やはり関心が高いんですよ、皆さん。人数が多かった分、臨場感がありましたよ。今日は、マスクもたくさん来ていましたね。

今後の取組・意気込み

ダニエル では、最後に今後の取組・意気込みについて教えてください。まずは団長さんから。

川寄団長 今日の経験を教訓に、今後も奈良市消防団として、皆さんの協力の下、一生懸命がんばっていきます。

ダニエル 田村さんはいかがですか。

田村副隊長 奈良県では、比較的、南部で災害が多く、奈良市は少ないほうなんです。自然災害が少ない奈良市において、住民のかたがたといっしょに、訓練など備えることが大事だということを、この訓練を境にもう一度考えていきたいと思います。

ダニエル 松本さんはどうですか。

松本班長 奈良は大地震がきたときに「陸の孤島」になるおそれがあると聞きました。ですから、「備えあれば憂いなし」ということで、先日も女性消防団員で「非常持ち出し袋」を再確認しました。安心してはダメだと気を引き締めています。

ダニエル 渡さんからも意気込みをお願いします。

渡室長 消防団のかたがたが持つ情報やネットワークを医療チームときちんとつなげて、より効率的な支援体制ができることが目的ですので、今回の訓練を「奈良市モデル」として全国に展開していきたいと思っています。

対談を終えて

今回のような、実際の被災状況に近い環境を整えての訓練は、災害現場の活動経験が少ない消防団員の皆さんにとっては、リアルな疑似体験として、たいへんよかったのではないかと思います。また、DPA Tなどの組織的なお話もたいへん勉強になりました。

今後はどうやって皆さんが上手にコミュニケーションをとっていくのかということが、た

いせつなことになるかと思います。

今回の訓練を通じて、皆さんの意識の高さに感心しました。私も今日はどんな訓練になるのかと思っていましたが、本当に貴重な体験をさせていただきました。ありがとうございました。奈良市消防団の皆さん、DPA Tの皆さんのいっそうの御活躍をお祈りいたします。

(ダニエル・カール)



左から田村副隊長、渡室長、ダニエル・カール氏、川寄団長、松本班長

(奈良市内で撮影)